

- 県では、県育成品種の早生茶豆「新潟系14号」の作付拡大による茶豆品種の継続出荷を推進。
- このため、保温及び雑草の発生抑制のためのマルチ被覆と、は種作業を一工程で行うマルチ播種機を用いた直は栽培技術を、「新潟系14号」で確立するための実証活動及び技術確立を実施。
- その結果、マルチ直は栽培技術の新たな導入が進むとともに、「新潟系14号」の栽培面積が拡大

具体的な成果

1 栽培技術の確立と技術導入

- 実証では、マルチ被覆による発芽の安定、収穫時期の前進化、収量の増加を確認。



播種作業



収穫時の株姿

- 新潟系14号のマルチ直はでの栽培方法について体系化。

2 栽培面積の拡大

- 新潟系14号の栽培は、従来の無マルチ直は栽培と移植栽培に加え、直はマルチ栽培が導入され、面積が拡大。

○ マルチ直は栽培取組産地
0産地(R1) → 6産地(R3)

○ 新潟系14号栽培面積
25.9ha(R1) → 53.8ha(R3)

普及指導員の活動

令和2～3年

- は種時期、株間、マルチの3項目に関する実証ほを6産地に設置。
- は種機実演会を各産地ごとに開催。
- 現地検討会や成績検討会での検討。



- 実需者と意見交換を行い、新潟系14号の需要について情報収集。
- 試験結果をえだまめ担当者会議等を通じて情報提供。

令和3年

- 「新潟系14号のマルチ直は等栽培方法」について栽培マニュアルを作成。

普及指導員だからできたこと

・国や他県の成果を知る普及員だからこそ、新技術導入を提案し、新潟県及び県育成品種にあった栽培方法を確立、導入させることが可能。

・日頃から連携している機械メーカーと産地関係者を結びつけて実証し、その結果を県内産地へ情報提供することで、技術の波及が図られた。

新潟県

えだまめ早生品種の直は栽培技術確立による生産拡大支援

活動期間：令和2～3年度

1. 取組の背景

本県のえだまめは、食味が良好な茶豆品種が出荷量の約6割を占めている。茶豆品種は「新潟茶豆」「新潟あま茶豆」（J A全農にいがた登録商標）として、8月上旬～下旬を中心に県内及び首都圏へ出荷され、実需からの評価も高い。

7月上旬～下旬の栽培品種を県育成品種の早生茶豆「新潟系14号」へ転換又は作付拡大することで、7月上旬～8月下旬まで茶豆品種の継続出荷を図り、実需からの需要に応えるとともに、更なるブランド力の向上を目指している。

栽培面積拡大のために、省力技術である直播栽培の導入が進んできているものの、早生茶豆品種では低温時期の発芽不良や雑草の発生による収量低下が課題となっている。

このため、保温及び雑草の発生抑制のためのマルチ被覆と、播種作業を一工程で行うマルチ播種機を用いた直播栽培技術を、早生茶豆品種「新潟系14号」で確立し、新技術の導入及び普及を進めることで生産拡大を支援した。

2. 活動内容

(1) 実証ほの設置

- ・新品種・新技術の確立支援事業（国補、R2～3）を活用し、県内6産地で実証ほを設置、は種を4月上旬～5月中旬までとし、は種時期、株間、マルチの有無の3項目について比較検討した。
- ・は種作業時には、機械実演会を各産地ごとに行い、新技術の紹介を行った。

(2) 中間及び成績検討会の実施

- ・各産地の実証担当農家及びJ A営農担当及び関係機関を集め、現地実証ほで中間検討会を実施、実証を通じた成果や課題等の意見交換を行った。
- ・成績検討会では、とりまとめたデータをもとに、農研機構から助言をもらいながら、機械メーカーや試験研究機関、普及員と意見交換を行った。



は種実演会

中間検討会

(3) 実需者への意向調査

- ・ 試食サンプルを実需者へ送付しリモートによる意見交換等を行った。

(4) 栽培マニュアルの作成検討

- ・ 成績検討会での検討内容をもとに直は栽培技術の体系化を検討、マニュアルとして取りまとめた。

3. 具体的な成果

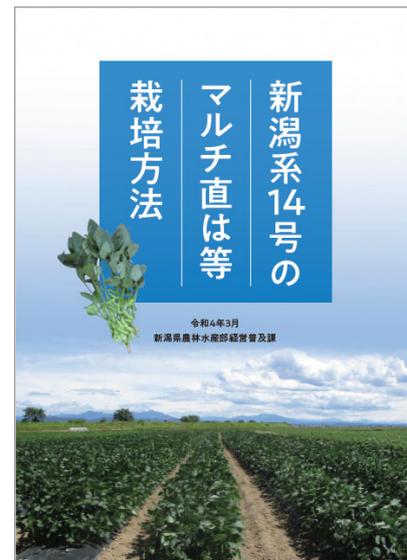
- ・ 実証では、マルチ被覆による発芽の安定、収穫時期の前進化、収量の増加を確認、栽培マニュアル「新潟系 14 号のマルチ直は等栽培方法」として取りまとめ配布した。
- ・ 新潟系 14 号の栽培は、従来の無マルチ直は栽培と移植栽培に加え、直はマルチ栽培が導入され、面積が拡大している。

○マルチ直は栽培取組産地

0 産地 (R 1) → 6 産地 (R 3)

○新潟系 14 号栽培面積[※]

25.9ha (R 1) → 53.8ha (R 3)



マニュアル

4. 農家等からの評価・コメント

JA えちご上越 営農部園芸畜産課 阿部純一

- ・ 当産地では、直は栽培が多くを占めており、発芽率向上や雑草対策が課題となっている。今回、新潟系 14 号でマルチ直はによる実証を行い効果が確認できたことから、マルチは種機を導入して早生品種の栽培面積を拡大している。

5. 普及指導員のコメント

経営普及課 農業革新支援担当 江口喜久子

「耕うん同時うね立て作業機によるえだまめマルチ直は技術」を、農研機構及び機械メーカー等と連携することで、新潟系14号での技術が確立され、産地での導入が行われている。引き続き、産地の拡大に向け、栽培上の課題等について解決を図りたい。

6. 現状・今後の展開等

- ・排水対策や事前耕の方法について記載したマニュアルをもとに技術指導及び面積拡大を進めるいるところ。
- ・マルチは種栽培での省力化及び品質の安定化を図るため基肥一発肥料について検討する。